



日本開闢由來

三卷

へ遠13
2473
3



門へ遠13
2473
巻 3

日本國開闢由來記卷三

指漏漁者 歸

神武天皇

昔小日神の威を負く影に隨て賊虜を壓躡

神武天皇と。神日本磐余彦天皇と稱す。彦波瀲武鸕鷀草葺不合命の
弟四の御子なり。母を玉依姫とまじたま。我邦の太古神も人も皆私の情
なけむを。必兄を以て世を嗣ことせむ。唯其徳の優りゆを撰ぶ故に。
兄五瀬命稻飯命三毛野命を置く。立て太子となり。天皇生るる
みく明達意確如中。ゆも長となり。日向國吾田の邑吾平津
媛を娶く。妃となす。手研身命を生む。年四十五歳ふる。時

門へ遠13
2473
巻 3

日本國開闢由來記卷三

指漏漁者編

太祖東征の功績に依り天業を宇内へ恢弘

背ふ日神の威を負り影に隨て賊虜を壓躡

神武天皇と神日本磐余彦天皇と稱す彦波瀲武鸕鷀草葺不合命の

弟四の御子なり母と玉依姫とまじり我邦の太古神も人も皆私情

なきを以て必兄を以て世を嗣とせむ唯其徳の優りゆを撰ぶ故に

兄五瀬命稻飯命三毛野命を置く立て太子となりてまゝ天皇生るが

みへ明達意確如くは長となりて日向國吾田の邑吾平津

媛を娶り妃となす手研耳命を生るる年四十五歳ありて時

日本書紀

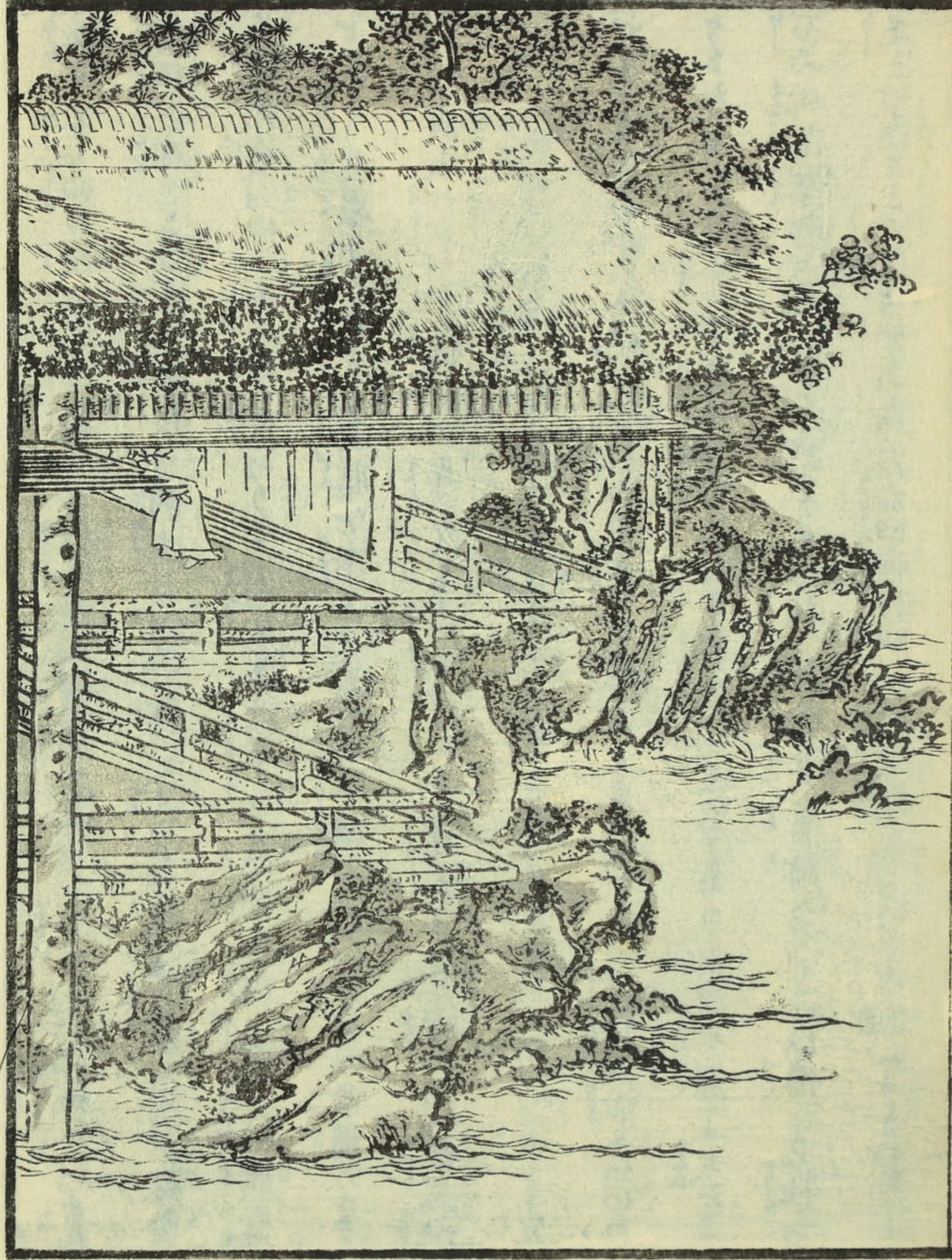
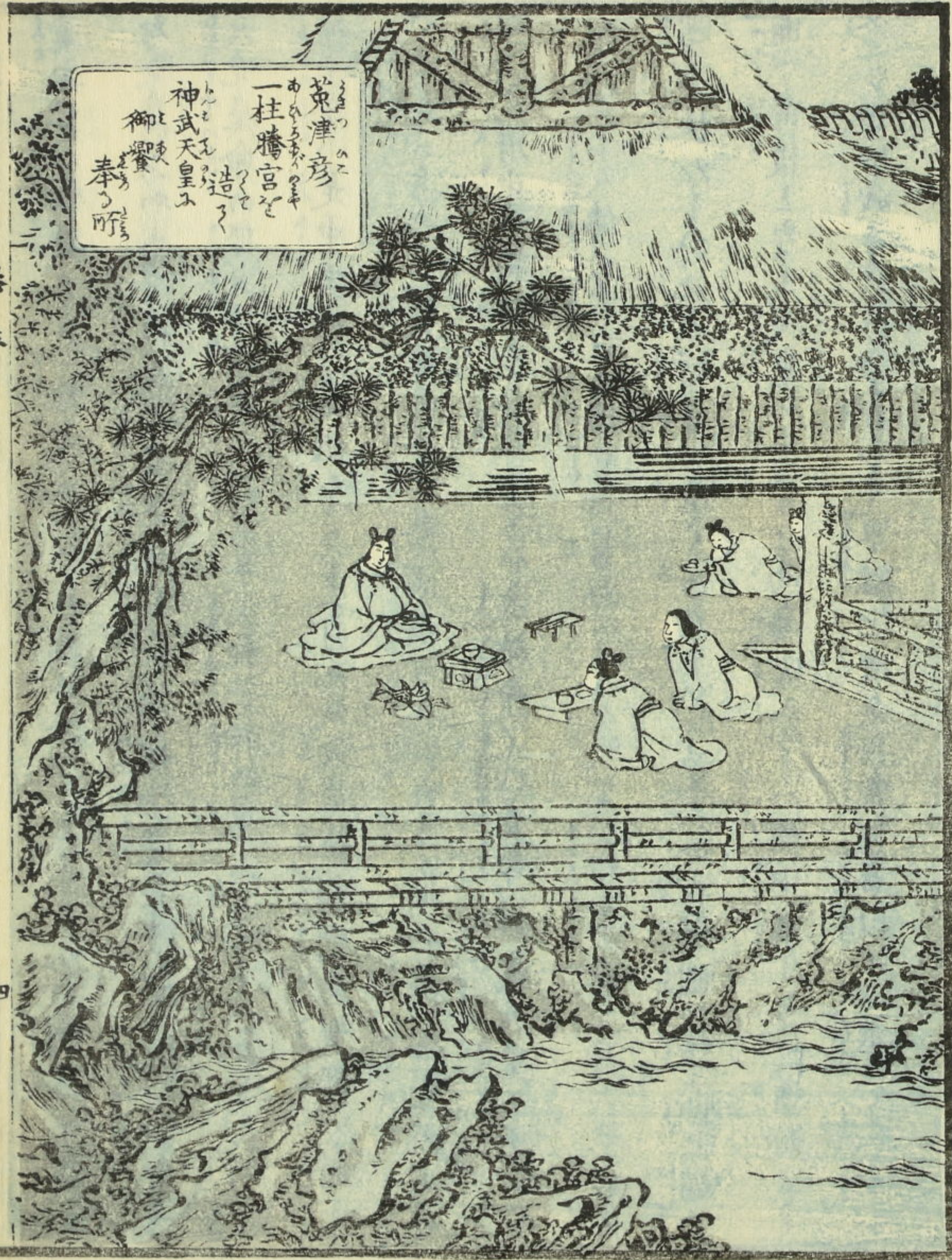


其兄五瀬命等と御子手研耳命と高千穂の宮に坐し相議とまふ
此日向國の邊僻あり王化を普く天下に及ぶ便宜よわく何の地も
遷る。大業を成就せん昔我天神高皇產靈尊と大日靈尊此豊葦
原の瑞穂國を我天祖彦火瓊杵尊に授けしなり是に於て彦火瓊杵尊
天の磐坐を離れ五百重の雲を排闥し御前を駢蹕し此土に戻止
たまふ。運の鴻荒の屬時ハ草昧の鍾ぬを唯其屯蒙たる中ハ淳素
なる風俗不隨ひ唯專一は正直の道を養ふ。此西偏に在て世を治め
たまふ。我皇祖皇考の功も神聖あり神聖あり神聖あり神聖あり
の年所を歴する。天祖の此邦に降跡するより以來今も速く二千
四百七十餘歳なれども遠邈ある地ハ猶いまも王化の德澤に霑す村落に

各自君長ありと稱す。人心を疆界を分て相互に凌燦りの多うて治難し
昔吾塩土の老翁不聽たること。此日向國より東の方に當て青山四方に
環回す。山河の風光擅美き美地あり。其中小天の磐舟に乗て天上より飛下し
者ありといふ。吾謂ふ彼地ハ天業を恢弘く。天下を光宅とするに可き地なり
て。蓋六合の中心なる所。厥飛降しといふ。察ふ是必鏡速日ありん。彼
天神の御祖の詔を稟て大虚空を翔行ふの郷を巡視く。河内の國河上
の峯に天降て。倭國鳥見の白庭山に遷居し聽く。是は是なる所なり
故に吾もまゝ此地に就く都す。わりのあり。其の議如何と詔する。其
諸兄及皇子も僉曰く詔の旨一に理實灼然なる也。臣等も恒に其
事を念ぬることあり。速くを啟行しんと答奉ける。是に於て太歳

甲寅ふ當り冬十月五日、我装成整々、天皇親諸兄及皇子、帥東出
て豊後國速吸の水門、不到さ中、時一箇の漁人の艇、乘て來り。依
栗の忌部の首の祖天の日鷲、命を遣て。ことを見せしめ、たふふ。たふて還
來て復命せしむ。彼此國の主ふ。名を珍彦とせしむ。を答へしむ。召率て
來たりとて、御前見せしむ。珍彦天皇、白へ臣、此海灣、魚を釣て居り。が
天神の御子の來しと聞、故に迎奉んと思とる。御使を賜へしむ。速
參りしとせしむ。けしむ。天皇問、さう。然らば、汝々委く海陸の路を知らん。
我為、導仕んやとあり。けしむ。疾、領掌したり。天皇の勅ふ。珍彦
み推橋の末を授く。そとを捕せ。皇船、牽納せしむ。以て海路の導者
とあり。さしむ。されしとて、名を賜、推根津彦とせしむ。呼しめたり。これ即倭の

直部等、始の祖あり。其處より行きて筑紫國菟狹、不到さ。此地今、豊
前國の郡とあり。大菟狹の國造の祖、彌と兄、菟狹津彦とあり。妹を
菟狹津媛とあり。兩人の者、りりて、天皇を迎奉り。菟狹の川上、一柱、騰宮
を造る。其處、入奉る。饗膳を奉る。大の一柱、騰宮とあり。今、その造構の
成あり。一方、宇佐川の岸、なる山、趾に治り、建たる。一方、川、臨り。流
の中、大なる柱、唯一を建る。支る。そのなる。柱、を川の方より
視し。川の中、建る柱、の、高く騰る。とあり。一柱、騰宮とあり。い
たる。今、宇佐八幡宮の西、驛館川、とあり。あり。その水源、大なる
石の穴を穿たる。の、多く残り。ある。土人、其舊跡、あり。といひ傳る。柱、を
足といふ。後の世、も。左右四柱の門を、四足門、といふ。例なる。柱、を



漢土みて一柱觀。或ハ木履觀をといふ。又まてらの製造不類似
たるものありあはれけん。天皇其妹菟狹津媛を愛たまひく。侍臣なる
天兒屋命の孫天の押雲比命の子天種子命の妻み為たまひたり。まろ天
種子命ハ是中臣氏の遠祖なり。十一月九日。天皇筑前國息賀郡の崗水
門に到たまふ。十二月廿七日。安藝國埃宮に到たまふ。此の處ハ安藝國安藝
郡みく。府中の總社とく。今もあはれ進雄命。大己貴命。神武天皇三座を祭
たまふ。土人傳て太古の埃宮ハ舊跡なりといふ。乙卯年春三月六日。吉備
國より徙たまひ。此ハ行宮を造く居たまひたまふ。此の吉備國ハ後ハ別て備前
備中備後となる。天皇の坐せり高島宮といふ。備中國ハそれ舊跡とく
今もなる。残るるといふ。此もく軍艦を造り。兵食を蓄。以て一舉く天が下を

平んと欲たまひ。その軍備を為たまひけり。三年を積。その軍實齊整て。戊午
年春二月十一日。皇師遂り東の方み赴き。船艦相接く。難波の寄み
一とれ奔潮ありく。太急み會ぬ。因く其處を名づくる浪速の國ともいふ。
浪華比國ともいひ。今ハ難波といふ。三月十日。流しの上を遊て
徑み河内の國乃草香の邑に青雲の白肩の津みゆりぬ。今の茨田郡の
枚方といふ。此白肩の名は轉りたるなり。夏四月四日。皇師兵を勅き。
大和國平郡郡なる龍田み趣く。こゝを立野越といふ。今ハ世ハ竜田越
といふ。此の異なり。此の竜田の路ハ狹嶮しく。人並行ことを得き。くを還
て更み東の方膽駒山を踰く。中洲に入たまふ。時ハ長髓彦こゝを
聞く。天の神は子乃來たまふ。ハ必定吾領國を奪んとの心なり。いふや

あまを禦んて己が屬兵を盡く。こゝを膽野山の内なる孔舎衛阪と
いふ。この孔舎衛阪といふは河内郡の屬く名を草香嶺ともいひ。今乃世ふ
暗嶺といふて其山の麓は日下の聖といふ處なり。和泉國大島の郡に
たり。皇師への長髓彦が兵と出會く戦へば皇兄五瀬命流矢は
臑を射り
ま。大に痛惱たまひ。且長髓彦が軍強くして皇師進戦つと
あまを憂たまひ。忽神策を冲襟に運たまひ。曰今吾のこゝに
子孫ありて日に向く虜を征んといふ。天の道は逆り速く退還て弱さを
示し神祇を禮祀す。背は日の神の威光を負。影は隨く壓躡ん
如此為ば曾く刃は血ぬらざらん。虜は心自敗なるといふ。食曰然り
我日御陰に使く。いよを征らば。虜は反て日に向の畏れり。然らば

神策の如く虜は心自敗んこと必定ならん。邊に軍中ふ令を下して且停
復進あとなうとて。軍を引く還たまひ。虜も亦て敢て進ん
む。是は小於て御軍の易くと草香邑白肩の津に引きて。盾を植並
雄詰けり。あは雄詰といふは男叫といひ。責聲を發て敵は勇威を示た
めく。後世陣中ふ。時の聲を揚ぐことの初なり。此草香津に盾を植
其處の名を改く盾津といひ。後訛く蓼津といふ。五月八日。茅津山
城の水門あり。茅津まは血沼といふ。今乃和泉國なり。時小五瀬命
創の苦痛大に進たまひ。叙柄を握。憤激雄詰して曰く。吾は大夫あり。
賤奴の為に傷を被。報がて死んこと。悔なきこと。大に慨嘆たまひ。進
紀伊國名草郡の龜山といふ地あり。五瀬命は遂に軍中ふ死なむ。天皇

熊野なる荒阪の津に皇船を泊らせしむ。荒阪の津亦の名を丹敷の浦と
もいひ。今、濱の宮といふ。新宮を距ること三里許あり。其の處より陸み上りたまひ
その濱の宮なる丹敷戸部といふ兇徒を誅す。これに勝たまひし。その地
兇神ありて。口より毒氣を吐く。皇軍を惱めしむ。人々おれお中々感瘁ぬる。不
よ。皇軍復振ぶ。て。あ。躑躅たり。然るに其處に躑躅を熊野の、高倉
下といふ者あり。ある夜の夢に。天照大神。武甕槌神。葦原の中つ國甚喧擾さ
響の聴き。汝往く之を平げよ。このまひたれば。武甕雷神對て。臣とさ。ら。み
行とも。吾平國の劍を下さ。國土おのづから平なんとぞ申奉る。天照大神
實み然りと。このまひて之を誅す。まひたれば。武甕雷神顧て高倉下を召て。吾劍
と部靈といふ。今、汝が庫の裏に置るる。速に取らば。天孫に獻すこと

ありければ。高倉下の唯々と應ぬと。夢に覺ふなり。此は幽顯分界とて。神と人
とは通路に絶て。相視ことのを。世とありける。後なるを。高倉下の性怒忠
實を以て。其夢に此事を見せ。劍を下し。たまひ。高倉下の夢の様を
奇異の事おかし。明且を待。速に庫を開て之を視。果
屋を貫て庫の底板の上。倒し。劍の落。立ち。あれを取。御陣に参
て進奉る。天皇大に喜悅たまひ。此刀を佐士布都神といひ。ま。布都
の御魂と名を。石上の神宮に在。其處より中洲の大和の國に踰る
ところの路に。嶮。分。行。方。も。知。難。外。の。路。も。あ。り。
また。諸軍い。て。此山を跋。険。と。志。を。接。違。其。處。日。の。暮。ふ。あり。
天皇も。の。事。を。深く。憂。ふ。や。睡。たまひ。其。夜。の。御。夢。に。天。照。大。神

の詔。朕今頭八咫鳥を遣て郷導と為んとのごまひり。夜明く空を
視たゆえを果して夥き鴉の尋常のようを大なるが虚空より翔り降るを。
天皇御覽して。此鳥の來去と。かのぼりら 祥夢み合ひ。大哉赫矣。我皇祖天照大
神の基業を助成さすふとの有難さ。いざや此鳥の行ふに従ふ軍を
遣と。急ふ令を傳て。先大伴氏の遠祖日臣命。大木目の督將元戎を帥しめ
る。山を踏啓て行ふ。其鳥の向くを尋て仰視て。われを追く驅り。遂に菟田の
下縣に達到。ある傳ふ神魂命の孫。鴨建須見命。大鳥と化し。翔飛て導奉
て。中洲に達し。天皇その功を喜て。厚く褒賞し。たゆみりしめり。其後
八咫鳥の社を。大和國宇太郡置高角の神社といひ。今いふを乎。登古路須社
といふ。乃建須見命を祀奉り。なりともいひ。時日臣命の功を譽たむし。

汝へ忠告して且勇加能導の功あれを今よを汝が名を改く道の臣といひと
勅ありけり。皇軍を。丹敷の浦より伊勢の國なる大杉谷へ超る。吉野の
河尻に到り。さしめし。釜浅作る魚をとるのあり。天皇立ち上る。汝を誰
ぞと問ふ。しりし。乃は僕は是菟道持の子なり。答直み飯順申す。のらをり。
此の阿陀の鵜養部が遠祖なり。其地より幸行吉野首等が祖。井氷鹿とい
者。吉野の國葉が祖の石押分の子なり。追ひ参迎て従奉る。今も吉野
川に浴る。南國柘村といふありて。其邊七箇村をどく。國柘莊といふあり。其地
より踏穿越る。宇陀に幸ゆ。たれみよる。其幸ゆりしところを。て
菟田の穿邑といふあり。秋八月二日。天皇人を使さす。兄猾及弟猾を。つ
かのを徴しむ。六の兩人。菟田縣の魁師なり。六の兄弟といふ。この大國主

神の八十神の如く。同系より別て。従兄弟再従三従兄弟とありて也。その兄の家
と兄といひ弟の家を弟といふが如く。唯同族と呼ぶものともえたり。その兄猶へ
召し應せむ。弟猶を御使と俱し軍門に詣りて。天皇を拜し奉る。且竊り
告奉へ。臣が兄猶が逆状を為すこと。天孫到たまふと聞て。兵を起て襲奉んと
せり。とも。皇師の威を望見く。大に懼敢て敵し奉り難きこととあり。より
潜し其兵器を伏匿す。新し宮殿を造る。その殿の裏に押機を施す。御饗
ふ事よむ。その中に入奉り。壁殺奉んとする欺謀を為す。以て聞ぬれば。速
し行く。さほぐし諫争し。のども更し兼諾を止む。を得ず。この事
懇しをすなり。善くれば備をたると言上あり。天皇の命
聽し。道臣命を勅す。其及逆の状を察せしめ。ひたれば。道臣命

往く。大を鑿て。その賊害奉んとする奸謀あることを審み知り。大を怒り。詰責し。曰。虜爾が造るところの屋に爾居し。剣を按り。鬻。逼催
て。追入る。兄猶へ恐懼根損す。遂し其新室に入。過てその機を踏。押
し。壓し。撃れ。死す。その屍を引出し。寸断し。斬り。血を流す。地を
浸る。ふより。其處を踏す。菟田の血原といひ。弟猶へ鯨肉と酒とを齎し
來る。軍士を勞饗けし。天皇其酒肉を軍卒に班賜て。御歌を詠せ
たまふ。その御歌ふ。

菟田の田垣に。離羅設。我待や。離々障らず。勇妙し。鯨障ふ。前妻が魚
乞さば。立抗稜の肉の長けく。幾許ぞ。聶絲。後妻が魚乞さば。拾實の
大けく。幾許陀。聶絲。○を乞く。神世より。漸人の世とあり。そは

前後の歌の意も詞もや異なることあるを。後の世は意を以て倉卒
小了解難きといもまこと多かれどよく翫味を志す我邦上古淳樸質實
みくも毫も縁飾なく真実なるところの性情の其中小自見せし言
外の深意あるものなり。六の御歌の大意を畧し釋を先この歌乃初句
倭のとう四字一句脱してわつらんとし説あり。左もあるなり。歌の意
々。倭の菟田の田垣とて。田の圍小垣と結構なる處小。鮪を捕んと
罾を張らるる。鳴へ障掛りせし。思もよろぬ鮪を掛らるるぞと。弟猶が
齋來一鯨を覽たまひ。兄猶が天皇を弑奉んとて設たる機小自己が
壓して死たつことを譬たまひしものなり。そはより下ふ其譬
喩の意はなく。軍士の妻妾などが魚を乞はるる。此鯨肉の長く大

なるを幾許も翫みして多く興と詠たまふる。立机棧と伊杵木へ
實とのうすでの發語も。木の實を魚の肉みのひくけるもを。をへ
歌ふあも何ふは。その物の稱といへんとて。此發語を先言て後その
事り及ぶを。我邦上古の習あり。畢竟へ人の心の寛舒なることあり
出るりのなり。此御歌の御詞も。諸卒の妻妾も。をも愛惠たまふ
御意ハ自知とくか不ゆるを。前後ともみそを。譬喩とて。後世の謬
慮たるなり。

第五 志必克小在る軍將の戦勝る自誇者を誡む
鏡速日よ。天人の跡を。知衆を率る。歸順

九月五日。天皇菟田の高倉山の嶺小陟たまひ。域中を瞻望たまふ。伊賀

村の上は方ふ伊勢伊賀西國に跨ぐ。高く聳たる國見岳という山あり。其處
ふ八十梟帥とて、稀勇なる兇漢が。數多の黨與と召集く立籠り。女阪
女軍を置。男阪に男軍を置。墨阪に炭火を設く。備を堅う。夫乃女阪とい
へ。宇陀郡宮奥村の西にあり。十市郡の界なり。男阪といふ。宇陀郡半阪
村の西にあり。城上郡乃界なり。男阪女阪といふ。後世の追手搦手のこと
ふ。軍士は勇壯。之を選。追手ふ屯させ。其餘を搦手の方へ使。之
守らしむ。そを男軍女軍といふ。男女のこと。之をいふ。夫は炭阪
とて。炭を阪に道に積置。一に歌寄來らば。其炭を燃して之を遮ん。之乃
設なり。此處へ宇陀郡萩原村の西にあり。本は炭阪なり。之をその文字
を轉く。今墨阪と呼ぶなり。其他十市郡の磐余邑ふ。兄磯城等が軍

充滿して。天皇の御軍寄來らば。拒戦んと待構。之の虜賊の據る。ところ
いづれも皆要害の地あり。道路險絶。卒に往通なき方。夫はあはれ。之
いづれも。智略驍勇者あり。容易攻入なきやう。はなり。とせん。之をこの
八十梟帥といふ。其處此處に黨を結く。住居。或は山岳に大室。或は大壑。土
を築。城郭を構。殘暴兇勇。徒を多く集て。人民を悩。之を蜘蛛の網を張て
飛ぶ。蟲を取。之が如く。なる者。ども。時の人呼て。土蜘蛛といふ。八十と大數
をいひ。其一群。ぶ。七十八の數。餘る梟帥なり。八十梟帥といふ。あはれ。
一人の名。夫は。さるなり。されど。天皇。夫は。毫も屈滞。とも。御情。は。唯。土
卒。と多く。損。之を。征平。おん。と。を。お。先。その。首魁。なる。國見。岳
の八十梟帥を。伐んと。兵を。勅。出た。その。御志。必克。之。存て。御歌

と詠せたまふ。その御歌よ。

神風の伊勢に海の大石小やの蔓延廻る。細螺子の吾子よ。細螺子の
い蔓延廻る。撃つ息ん。御歌の意へ先小熊野を經く。伊勢の海に
界ある錦の浦乃邊までも巡幸したまひしを。其處ある海岸ある
大石小細螺子の多く匍匐廻るを御覽ありたるを今所念出させ
たまひし。梟帥どもの師たるの細螺子の大石小夥く纏はさたる如く
わらも一舉小打滅とてその意小譬たまひし。將卒を親とて
吾子どもらよ。皆然思ひし。されと夥き細螺子の如く數多
の虜賊たるも小敵なりとて侮らたうれと。諸軍の心を勵し。このまはる
かのま。

さの餘黨たる不繁なく。其情もよ。縁測ごとく。強り力戦を好まむなま
を。密小道の臣に命小救して。汝速小大来日部。率たる。大石士卒を
帥く。大室を忍阪の邑小造せ。宴饗を設く。虜賊を誘導て之を殺せ。令
勅ありたる。道臣命。速り其密旨を得く。虜小虚謀より。此情を
し。忍阪ある儲侍を。昔をいせけ。虜賊ども。蠢思あり。我小
陰謀あること。汝知。遂小誑賄され。盡く集會ける。此方小俄小大室
と造りて。後道臣命。猛卒を選出。陰小軍士小期て。曰く。酒酣ならん
ころ。吾則起。歌なる。舞ん。是時汝等吾歌の聲を。暗令と意得く。
期を過。一時小起。虜を刺殺せと示さ。坐定。酒を行。小虜ら
情小任。恣小醉。と。道臣命。起。歌。を。歌。

忍阪の大室屋ふ人多し。來入居ども。瑞ふ。來目の子ら。我頭雅い石
槌の持撃てし止ん。この歌の意。頭椎石槌の皆太古の劍
名あり。頭とも。今も俗にふるあるなるものなるが如く。頭のとあり。劍
の頭をのひ石槌とも。其頭を石あり造るものをものふる。性歳大和
の三輪あり。劍の頭を石あり槌の如く造るを堀出せしとなり。
人多く此所を集居るあり。とを別く久米部の帥。久米の子らよ。
もやくそは佩たる劍あり。虜どもを刺殺せん。今バそは撃べき時なる
ぞ。諸卒不下知せしなり。瑞ふ。久米といえん。その發語なり。

諸卒此歌を聴より。速に起り俱に其劍を拵く。一時に刺殺たりしを。
此大室に集たる虜の喙類。盡く殺り遁得ざるものなり。皇軍大に

悦く。天を仰て大に咲ふ。その時道臣命を再うする歌。

今者豫々々々。阿々朝咲今ふも。吾子よく。○歌の意。虜乃心淺く
し。誑にぬること可笑し。生かすことよ。今もをやく。盡く殺
る。吾子等の功を稱嘆す。阿々朝咲と咲堂朝咲大笑し。歌ふなり。
後の世久米舞の時。此歌をよみ。後大に笑ひ。此故事の遺れる
なりといふなり。

道臣命まゝ歌て曰く。

虜を一人百人人々言ども。手對ひせど。○歌乃意。虜等が自己一人
を以て百人ふ當といふども。我も歌當者一人もなきて皆殺されたる
ことの其辞も似ぬ。怯まざるのひに。戲謔なり。

天皇此等の歌を聴しめ。軍將士卒は敵を侮誇を御覽して詔ひ戦
勝く驕るゝなるは良將の行なり。今盡身小比き小賊を撃得たりとも
漫不誇ことい最誠をさることこのまひりなり。後世の諺不勝て兜蓋乃
紐を固詰といふ語と。此聖訓の遺意不。實不國を開業を創とす。この
御志の天理不出るを以て心克んものとおもふが故不克てなり。自誇といふ
を誠をす。有難き御事なり。天皇再のまはく。今魁賊を以てたり。此
同惡者は黨與向々りのたふ十數群ありて。其情いま計易ら。如何を
一處止居。以て變を制するとなら。んやとのまひり。陣營を別處不
徒とす。ひたり。冬十一月七日。皇師大に舉て。磯城を攻んと。先使者を
遣く。兄磯城を徵と。兄磯城命を兼さるを以て。再頭八咫鳥を遣く。之を召

を。頭八咫鳥といふ。建角身命のまを以て。頭八咫鳥。其營に到。天
神の御子汝を召と。怡井參る。といひ。兄磯城念。天の壓神到
と聞く。吾あれを慨憤かりひる。奈何ぞ。自夸慢く。吾を招かといひ
て。弓を彎く。まを射んと。即不避去。兄磯城が宅に往く。
前の如く勅命に旨を速と。兄磯城も。惴然と容を改て。禮を為て。臣天
壓命到たまふと聞く。且夕小畏懼。御使を賜く。参見とある。との身小
餘と喜。といひ。頭八咫鳥を厚く食饗て。後俱不詰到。告て曰。臣兄
磯城。天神の子來と。まを聞く。八十梟師を聚兵甲を具て。與小戦を決せ
んと。ひけを。臣まを諫と。聞ざれ。止こと。得を。獨到詰て。告奉
り。早くとれ。圖と。まを申ける。まをよ。天皇。諸將を會て。問

今兄磯城果て逆意あつた。いふ招も来り。如何に善うらん。各
異見あつて申さうと詔々も。諸將答ふ。兄磯城執強うとも再身磯
城を遣う曉諭たす。兄倉下。弟倉下など。弟磯城を説示し
いざとも歸順奉さうんとも至る。兵を擧ておま臨む。いんとも
いざとも。玃のらと申け。天皇のより寛仁大度ありけり。を
實ふりと諾たす。乃弟磯城を御使として遣さる。いほぐ。お利害を
開示せらる。兄磯城。堪ぢりて拙計を固守て肯く。養伏奉さる。わ
是。於て推根津彦謀て曰。今先我弱兵を遣はす。忍阪の道より出な
る。虜いふを視る。必銃卒を尽す。我軍も赴ん。その時吾の勁卒を馳
馳。直に墨阪を登行。菟田の水を取。これが。赫炭を灌て。其火を消す。

倏忽の間。おの。不意に出る。之を破ん。お。必定か。う。といひけ。天皇その策
を善う。た。先弱兵を出して。これ。お。虜も果し。く
大兵の到ぬ。お。い。衆を盡し。此手に向ひ。力の限防んと。を
待構。皇軍の。攻。必取。戦。必勝。と。い。續。戦争
ふ。介。曹の。士。疲弊。と。氣色。お。あ。天皇神速も。其。状態。を
察。お。御歌。い。將士の。心を。慰。お。その。御歌。お。
盾列。伊。那。瑤の。山。木。間。より。い。行。守。ひ。戦。我。の。飢。鳥。津
鳥。鷓。養。が。徒。も。今。助。來。ぬ。お。御歌の。意。菟田の。郡。の。伊。那。瑤
の。山。乃。樹。の。間。を。分。此。處。を。來。戦。こと。わ。れ。衆軍。悉。饑。疲
たらん。が。豫。約束。お。さ。程。お。鷓。養。部。が。兵。食。を



卷三

十



金色の
靈鷲の
飛來
天皇の
弓矢不
止
光を放つ所

齊来く。軍士を饗應し。我を助んりのぞ。然らる暫の間事なれば。忍
堪く待よかしと。聊士卒の心を慰たまひしなり。盾並の盾を並く
みく。箭を射とけり射へる。嶋津鳥の鵜とのみたる。例の發語あり。
虜への弱兵此出るを視る。果して推根津彦が謀しおとす。勢を畢し
る。小對しを勇兵を墨阪の方へ廻し。後より夾撃みぞりたり。虜の
意の外み出たる。よとよまば。大小周章蹂擾く。衆軍忽敗走て。遂に其
梟師兄磯城を捕く。よとよと殺て平げさしひたり。十二月四日。皇師長髓彦
と撃。よの長髓彦が軍強くして。卒に破難く。勝を取こと能ざりし。天
忽に陰く雲起とよえたる。小風暴く。氷雨降出しく。空の色朦朧あり
たる。中より。金色の靈鵲飛来て。皇の弓弭の上み止と。其光晔焜たる

恰も閃電の如くたりと。長髓彦が軍卒皆迷駭く。復力戦こと能はず。
大小辟易したりし。衆軍奇異の思を為しけり。この長髓彦といふ。
の。これ邑の名なりし。その處に住する兇賊の名となりし。然るに
中古大和の國に。石棺を發し。その中に括る骨の存くありし。が。
脛脚の骨極て長大あり。尋常の人と殊異なりし故に。これ大古の長髓彦
埋地あり。その骨なりし。邑の名の人の名となし。これ如何
ありん。脛骨の長きによる。名を得たりといふ。畢竟の臆想の説なり。を。
今み。在ていづとも定て言難く。よ。此地を時の人。鵜の邑といふ。を。
今鳥見といふ。訛るなり。往く。長髓彦と孔舎衛阪に戦し。これ五瀬
命流矢の中て。薙くまひし。と。天皇の深く御心不衛り。ちなひて憤懣

御情を懐せしむ。此役必其仇を盡く誅究くこれを報んと欲せしむ。御歌詠し其御歌み。

瑞。久米の子等。垣本に粟田あり。氣韭一莖。其根が本。其根芽繁く。撃てしむ。○これ御歌の意。氣韭とく。臭氣のはり。韭を長髓彦が兎根の憎むさ小譬。根の長髓彦。芽の其黨類小譬。長髓彦も黨類も皆縦さす漏さす討滅盡て止んとせしむ。久米の子等も一同爾心得よと勅を傳たまひしむ。此御歌み。粟田の韭を詠せたまひし。皇師の倭人しむ。數多の虜ども被撃平けたまひし。年月を経ること多きを。其間小殺を種々しむ。粟田の旁に偶韭の一莖生出たるを御覽しむ。それを詠せたまひし。虜の作す粟田の

御目小觸しを詠せしむ。何れ後の世の如く殊更に粟田を設出し詠せしむ。小觸しを詠せしむ。瑞。久米の子ら。垣本に殖し。薑口響く。予の忘れ。撃て止ん。この

御歌の意。この皇兄五瀬命。長髓彦の為に創傷を負く。盡くしむ。を慷慨をふし。この薑を咬く。口の疼て。定むるが如く。其愁傷の今も忘難けしむ。撃殺を止む。このこと。生薑の和名をけ。く。辛味の舌を螫し。齒感とゆう意。爾呼ぶ。なつとぞ。

詠せしむ。ひけしむ。軍卒御意を稟て。遣入兵を縦く。勵く。攻めしむ。

長髓彦軍兵や拒みくもえたるが長髓彦より行人を遣く。天皇み申く曰
嘗天神の子天の磐船に乗く天上を降して坐す。その名を櫛玉饒速日命と
いふ。此命吾妹三炊屋媛を娶く。児息を生む。可美真手命といふ。吾への
饒速日命と君として奉てあり。そを天神の子豈而種あらんや。奈何ぞ更り
天の神乃子なりと稱す。人の地を奪んとするを吾心み推察する。み必定詐
譎をらんを言せける。天皇おの饒速日命のこゝろ。豫より知りめたるを
かかす。ふそその確なる證左を視んと欲し。それを使み詔する。汝が君と
たら。果しく是天神の子なりを必表の物あるを。そを相示よとあり
けを。使還くそ其旨を述し。長髓彦も。饒速日命の天羽矢一隻と
歩鞞を以て天皇に示奉る。この羽々矢といふは二羽を以て造まる。矢あり。

長二尺五寸。こを彎くところの弓乃長七尺五寸あり。つを太古の制ありて。
中世は三羽を用ふ。四羽を用く造りの今上刺の鳴鏑み用くところなり。
歩鞞と云。歩人の帶るところの鞞なり。天皇これを御覽し。事實より
虚かりとぞとくこれを歸し。自御たまふところの天の羽々矢一隻と
歩鞞を。長髓彦の使み示したる。長髓彦のその天の表乃物の饒速日命
の齋來し物と。殊絶て尊貴ことを詳み知く。頗踞踏を懐と雖。わが
執拗褊心強し。顧慮ことなき。且凶器己み構く。その勢中小休なきなり
何ぞ。猶迷圖を固守て復改んとする意起ざり。饒速日命の本
より天神の慇懃に此豊葦原の中國を天孫み授けし。み定理ある
ことを明み知く。長髓彦み説示とのども。長髓彦の稟性悞恨て。天道

の授と申ふところと。人の力を以て為とす。大に相違あり。私の智を以て
よく悟逆をうごさることを知む。更にお受容る存尚ありしを。止ことを得む。
長髓彦を殺し。天神の子なる徵信の瑞を將く。之を天皇にお獻盡く其衆
を率く。歸順せり。天皇固より饒速日命の天より降来しこと知りし。
且その證左をも檢とす。今も天の瑞物を獻く。飯頃。その忠實の
志を褒寵たまひ。授るお神剣を以て。その勲勞に答たまひ。其子
可美真手命も。天の物部を率く。荒逆を翦平げ。海内を平定し。是を
股肱の職にお配。子孫にお傳く。長く治世の補佐とぞなり。此物
部氏の遠祖なり。物部の武士の稱あり。萬葉集への物之布。其物部
なども書く。武威勇猛のを呼て爾りるなり。我邦上古の天皇を始

とせしめり。大臣たちも武事を研究し。第一の要務となり。専武を以て
天下を治たまひ。雄畧天皇の頃より。囚獄決罰の事を司る者を物部
といひ。文を貴び武を卑む。柔弱なる唐土の制を交用たまひ。武官大に
下て我邦の上古大臣へ悉皆武官なることを遺失せしむ。遂に天下の政
の武家にお移る。今の泰平の世とわたり。神の幽謀あり。なる。余論
餘論の暫く。己未年春二月廿日。諸將お命て士卒を簡練。殘黨を驅平ん
と欲。專その軍備を為しめたまふ。是時添下郡の赤鹿山。新城戸畔の
りのあり。また同郡の和爾村の阪下に。居勢祝といふのあり。葛上郡の長
柄丘岬。猪祝といふ者あり。此三處の兇賊を皆土人の呼く土蜘蛛といふ。
此者ども専石窟などお棲居て。出て人を悩む。とて。彼深山におある

土蜘蛛の物を害か如くなるふ似とをかく呼なせるまう。それらの兇賊も
皆残暴者あり。各々の勇力を恃く。昔て來庭さるる。天皇備師を分遣
さるる。皆之を誅さるる。高尾張の邑に兇賊あり。其首魁の人となり。ハ
身短く。手足長く。頗侏儒の状ありて。まご蜘蛛ふも似とを。土人これを
土蜘蛛と呼り。軍士も之を襲撃し。時戲ふ葛の網を造られを掩て捕
たるふより。其邑の名を葛城とて呼るなり。其他磯城の八十島師との
皇師の爲み滅さるる。虜賊盡く平さけり。

日本開闢由來記卷三

